

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

地球のステージ

～世界と人をつながる行動へ

「地球のステージ」は映像と音楽と語りを組み合わせた新しい形のコンサートステージです。世界各地を医療救済や海外支援活動で歩いてきた医師、桑山紀彦が案内役となり、現地で出会った人々の明るくたくましく生きる姿を伝えていきます。現地で撮りためた写真とビデオ映像に語りと音楽をシンクロさせることで臨場感のあるステージを演出し、世界のこと、そこで生きる人々の想いを心で感じるよう公演をお届けしています。

設立にあたって

一九九六年一月に初めての「地球のステージ」が山形市内のライブスタジオで行われました。当時はJVC山形（現、国際ボランティアセンター山形・IVV）という団体の中で活動でした。

二〇〇二年八月、地球のステージは一つのNPO法人として独立し、海外支援活動と「地球のステージ」という公演活動に特化した団体となりました。地球のステージと桑山の活動を応援してくださる方を募り、会員として継続して活動を見守っていただく組織もあり、現在、会員数は五七〇人ほど、延べ人数でもまもなく二〇〇〇人を迎えます。

「地球のステージ」で全国をまわる

地球のステージは主に学校現場で国際理解や人権教育、PTA研修会など多岐に渡る目的の中で公演させていただいております。公演回数は年間二五〇回を数え、桑山

は病院勤務の傍ら、全国を飛び回っています。最近では行政や国際交流協会、JICA、企業などからの依頼も増えています。

地球のステージに登場するのは紛

争や貧困を抱える国、あるいは地震などの被災地とそこに生きる人々です。いずれも桑山自身が活動に訪れた地。映像編集や楽曲の制作も自分たちで行っています。

紛争、貧困、被災地：これらの言葉を聞いた時、あなたはどんなイメージを持ちますか？一見するとかわいそうだったり悲惨に思えたり、そんなところに行きたくないと思ったりするでしょう。しかし、実際、現場に出かけてみると全く違います。フィリピンのゴミの山に暮らす人々、子どもたちが学校に行くのは半日で、その後はゴミ拾いや水汲みの手伝いをして家計を支えます。水汲みをして、お父さんにその日の稼ぎを渡すと「よくがんばったね」とほめられます。その時の輝くような笑顔。自分が家族に必要とされていることを彼らは感じています。二〇〇三年二月、大地震によって街全体が消えたと言われたイラン南東部バムの街。避難民キャンプで毛布などの物資供給を行うと、「なぜ同じ人間のお前に助けてもらわなければならないのだ？」と疑問をぶつけら



↑「地球のステージ」公演風景

(特活) 地球のステージ

〒990-2402 山形県山形市小立1-10-30

TEL 023-625-1182 FAX 023-625-1206

e-mail : stageone@dewa.or.jp URL : http://www.e-stageone.org/index.html

海外での活動

パレスチナでは唯一、ガザ地区への入域を許可された団体として四年半ほど事務所と駐在員を置いて、現地の子どもたちに心のケア活動をやってきました。現在は治安の悪化と経済封鎖のため事務所は閉鎖しています。が、現地のエルアマル福祉財団が運営する学校の活動を応援するほか、心にたまった不安やストレスを演劇にして表現して人々と共に



↑試合開始

れ、支援活動の難しさに直面します。でも、それにめげず、おみやげに持って行ったサッカーボールを使って現地の子どもたちとサッカー大会を行いました。最初は遠巻きに見ていた大人たちも、ゴールを作ったり応援に駆けつけたり、次第にキャンプ全体がサッカー大会に向けて一つになっていきます。そして、最終的に優勝したチームを率いた監督は、わざわざ夜中にスタッフの所へやってきて「ありがとう」とだけ伝えて帰っていきましました。同じ目線で一つのことに取り組み、少しずつ立ち上がっていく人々。勇気をもらう思いです。

有しているこうという心のケア活動にも力を入れていきます。桑山は二〇〇〇年一月より東ティモールに出かけ、現地にあるバイロピテ診療所という病院を応援しています。アメリカ人のダン院長が留守にする間、バイロピテ診療所で医師として仕事をしたり、医療品や車を応援したりして現地の活動を支えています。渡航に併せてスタディーツアーも実施しており、ステージを観て興味を持たれた方、国際協力の現場に触れてみたい方などが参加しています。また、二〇〇八年七月より、妊産婦保健に関する事業が始まりました。今なお乳幼児の死亡率がとて高い東ティモール。その数を少しでも減らし、国の発展につなげるべく山間部の僻地へ出かけ、出産に関する知識や情報を提供するほか、助産師の育成にも力を入れています。

地震などがあればほかのNGOと協力して活動に出かけたり、京都にある日本国際民間協力会（NICCO）とも協力して、イラク難民の心のケアなども行っています。



↑ほったたの子ども

伝えたい想い

「地球のステージ」の公演で各地の学校をまわると、よく聴いてくださる学校もあればわざわざと落ち着かない学校もあります。

ざわざわの原因は、実はほんの数名のおしゃべりだったりします。それが体育館の反響とも相まって、ざわつきになってしまふ。本当は興味があつて聴きたいと思つている子どもたちが大多数だったりするのです。そんな時は「みんなの学校は、戦争状態みたいなものだ。一部の人が自らの利権を求めて違う行動をするために戦争は起こったりする。みんなの学校のざわつきも一部のおしゃべりをしたい人が勝手にしゃべっているから起こる。次の曲が終わったら、『聴きたい』という思いを込めて拍手を二割増にしてみよう。そうすることで、この戦争みたいなものは終わりにできるのだ」そう持ちかけてみます。すると、見事に拍手は増えて、会場は静かになります。一人ひとりの思いが大きな力になるのです。地球のステージは世界のことを伝えてくれるけれど、実は身近な問題として捉えることもできて、そこから世界ともつながりあることを伝えたいと思つています。

やさしさと素直さがあればどんな所でも人はつながりあえる、そんなお話をしてステージは幕を閉じます。



↑つたえる

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

日本ウガンダ友好協会

設立の経緯

一九九八年九月二七日に福井ウガンダ友好協会が設立されたのは、福井県坂井市出身の脇田不二子さんと夫であるマクローザフランシスさんが福井県民と共に、自国ウガンダ国民の医療・教育の向上に貢献したいという強い願望の下に心ある県民が集ったところから始まりました。翌年一九九九年三月にはマクローザさんをウガンダに派遣し、生まれ故郷の廃墟と化しつつあった家を完全にリフォームして正式にウガンダ政府が認めるヘルスケアセンターとして認定されたのが二〇〇二年の四月です。

ヘルスケアセンターの建設と維持

その間県内の小中学校および公民館などでウガンダの現状を訴え、学用品・衣類等の支援をはじめ里親になっていた多くの方も募ることができました。また福井県内外の個人法人からの支援金が集まり、今日までクラスルーム建設やヘルスケアセンターの維持が可能となっています。

具体的にウガンダの南部に位置するトゥンガモ県のニヤチ力村にヘルスケアセンターを建設して六年余、現地住民数万人以上が診療を受け、またニヤチ力小学校の校舎建設、小学生に対する学用品の付与、また学費資金の支援などを進める里親運動など現地の人々の医療や福祉の向上またエイズ予防教育等に貢献してきています。

現地村民のオーナーシップ向上

現地に経済的支援をしていくことは極めて必要ですが、何よりも現地に生きるウガンダ人の自主的な努力と主体性が啓発されるのが大事です。

現地ではわれわれ NGO のスタッフが中心となり、地域住民と地方行政も巻き込んで運営管理されています。例えば校舎を建設するに当たっても、資金は日本から支援しても村人が労働力を提供し、自分達の子ども達の学校やクリニック作りに参画しています。このことにより経済的に極めて効率的ばかりでなく、オーナー意識が格段に違つのです。

重要な地方での国際交流

二〇〇二年二月一日には福井県民に対して感謝の意をこめてウガンダのババ大使がウガンダ大使歓迎レセプションを通じ来県され、福井県国際交流会館にて福井県栗田知事・福井大学児嶋学長をはじめとする県の要人の方々と交流を深めることができました。またウガンダ人が小学校や公民館を回り、アフリカの地図を広げ説明に回るなどの交流をしました。文房具等が現地に送られ現地からは絵画などが交換されました。



↑ (完成された) ヘルスケアセンター

(特活) 日本ウガンダ友好協会

〒240-0051 神奈川県保土ヶ谷区上菅田町46メゾンラフィネ201号室 TEL & FAX 045-382-3733
e-mail : info@jufa-world.org URL : http://jufa-world.org/index.html

NGOが橋渡しとなって

また、現地では二〇〇五年一月一日には当時ニャチカ村に建設中である協会支援のセミナーハウスの定礎式に元ウガンダ大統領ビナイサ夫妻をはじめとする国会議員・県知事・村長等ウガンダ国内の有力者や村民数百名が集い、これまでの友好協会を通じての日本国民の支援に対して心から感謝の意を述べてくださいました。また協会を通じて現地に贈られる医療品・学用品・古着等は輸入税を免除されるなどの特典が与えられました。これはひとえに数年以上の貢献が現地に認識されたと言ってよいでしょう。このように廃墟と化した一つの家がクリニックとして生まれ変わり、地方村に水道が引かれ、暴風雨により荒廃していた自然環境も植樹により、あたりは一面に輝くばかりに様変わりしました。また現地農業の発展の為にAAA(Aジア・アフリカ協会)との協力体制も組むことができました。また三年前の四月からは、友好協会のご縁で福井大学医学部整形外科馬場教授指導のもと、毎年一人のウガンダ外科医が日本の最先端の整形外科医療技術を習得するために滞在することになりました。今後毎年一人一年の契約で五〜七人のマケレレ大学卒のウガンダ外科医が整形外科技術取得のために来福する予定で、アフリカからの外科留学は日本で初めてのことのようです。このように具体的に、国を創る「意気込みを

持った人材を育成し当該国に根を生やす活動を福井大学をはじめとするいくつかの国立大学が共同で支援されていることはうれしい限りです。

福井から日本へそして世界へ

このように現地と日本でも公的に認められる実績を地道に築きつつありますが、二四〇〇万人余のウガンダ国民の現状からするとあまりにも微々たることです。また、福井県民ばかりでなく広く日本国内から支援も得てウガンダ国に広く深く支援していくことが緊要とのことから三年前に特定非営利活動法人日本ウガンダ友好協会として活動することになりました。このことを前後として関東からまた淡路島からも、大きな支援を受け、私達以上に親身になって現地発展の為に、ウガンダを訪問してサポートしてくださる方が現れてきています。何よりも現地スタッフの誠実かつ明確な方針と熱意の表れだと思えます。現地に欧米の自主的ボランティアもスタッフとして現地に新たな息吹を吹き込んでくれました。

具体的目標と現実の課題

現在はトゥンガモ地区ニャチカ村辺りの住民であるなしかかわらず、だれでもヘルスケアセンターにてわずかの診療費で診察治療が受けられます。このクリニックができる前は妊産婦をはじめとする病弱者や患者が四〇数kmを歩かなければ隣村の診療

所にて治療を受けられない状況でした。贈答された学用品等も無差別に小学生に渡されており、クラスルーム建設によりすべての住民の子女が恩恵を蒙っています。

また、最近完成されたコミュニティハウスにて開催されるエイズやマラリア等の風土病からの予防医学および教育啓蒙活動は現地のモラル高き青壮年や有識者によって運営されます。この場所近隣の村民たちは啓蒙を受け、医療事情の向上とともに農業技術の向上 また貧困から脱却するよき契機となつてほしいと願うばかりです。

現地への支援は会員の会費からなっていますが現地でのヘルスケアセンターの維持や今後の計画を考えますと、日本国内での専従スタッフが必要となります。

これからも日本ウガンダ国民相互間の友好親睦を図り、文化・宗教および異なる多民族から構成されているウガンダ国現地への支援活動を維持発展させていきたいと願っています。



↑大使と共に



↑学用品の支援を受けた子ども達